

在宅医療・介護を考える北空知地域住民フォーラム in 沼田の開催報告

～ いずれはみんなに訪れる人生の最期 どう迎えたいですか？ どう送りたいですか？ ～

- ・ 日 時 令和5年10月21日（土）13:30～15:45
- ・ 場 所 沼田町健康福祉総合センターふれあい すこやかホール
- ・ 参加者 97名（沼田町68名、妹背牛町5名、秩父別町5名、北竜町3名、深川市14名、その他1名 うち一般60名、支援関係者37名）
- ・ 目 的 北空知地域の住民の方に在宅医療や介護、地域での支え合いについて考えてもらう地域啓発の場とする

開会挨拶する沼田町の横山町長



司会進行は沼田町保健福祉課の森田主幹

- ・ 事前申込者は91名でしたが、沼田町の方を中心に続々と入場され、当日の参加者は97名と当初の目標の100名をほぼ達成する参加をいただきました。
- ・ 今年も早くから来場された方に、「ライスパワー体操」のビデオを放映し、介護予防体操を紹介しました。ビデオを見ながら一緒に身体を動かしてくれた方もいらっしゃいました。
- ・ 司会進行は、開催地の沼田町保健福祉課森田主幹です。
- ・ 最初に、沼田町の横山町長から歓迎の開会挨拶をいただきました。



北空知の取組を紹介する村田事務局長

- ・ 北空知地域の在宅医療・介護の取組では、北空知地域医療介護連携支援センターの村田事務局長と深川市立病院訪問看護ステーションみのりの立花管理者のお二人からお話いただきました。
- ・ 村田事務局長からは「自宅で安心して暮らすために～チーム北空知の取組」と題し、北空知の医療と介護は、人や資源に限りがあり、全てのサービスを提供できるわけではないため、関係者が知恵と力を集めて連携し不足分をカバーしようとしている取り組みの紹介がありました。
- ・ そして事業所同士だけでなく地域住民の助けあいや、困った時の相談先の紹介、そして緊急時の備えを普段からしていくことの大切さについて説明がありました。
- ・ 介護予防や健康づくり、病気や介護を必要になった時の対応など、住民の皆さんに考えてほしいこと、やってほしいことを協議会発行のパンフレット「住み慣れたまちで安心して暮らすために」を使ってお話をいただきました。



今年も開会前に介護予防体操「ライスパワー体操」を紹介





患者・利用者を多職
種連携で住み慣れ
た地域過ごせるよう
支援します



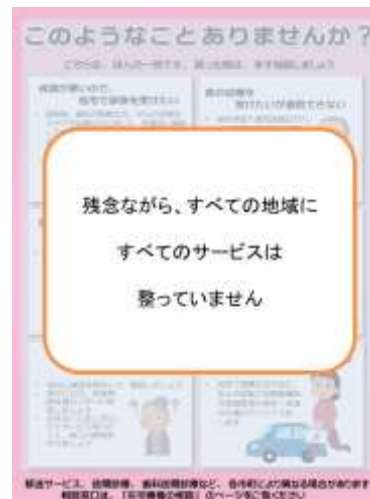
訪問看護の事例を 紹介する立花さん

家族に見守られながら永眠

「家に帰って来てよかった。一緒にいれて安心できた。お父さんにさみしい思いさせられなかったからよかった。お父さんありがとう。」と手を握られた。



講演する Wellbe Design
篠原理事長



- ・続いて、立花管理者からは、訪問看護の活動を3つの事例から紹介をいただきました。
- ・1例目は、消化器の手術後に合併症で腸閉塞を患い入退院を繰り返す独居男性が、訪問介護の導入により買い物や食生活などを整えることができ、また薬の飲み忘れも少なくなって趣味の野菜作りができるようになった事例。
- ・2例目は、慢性心不全で独居の90代女性が、出来るだけ家で過ごしたいという本人と家族の意向から訪問看護導入と作業療法士の介入があり、ゆっくりではあるが自分のペースで生活ができるようになった後、退院後4年が経過し心臓が弱り施設入所を検討するものの、最後は在宅で看取りとなった事例。
- ・3例目は、末期がんの一人暮らしの60代男性が、ケアマネ、福祉用具、訪問看護などが連携し、出来る限り自宅で生活し、腹水を抜くため訪問診療の導入があり、最期は在宅で亡くなれた方の事例で、「家に帰って来てよかった。一緒に入って安心できた」と家族に見守られながら永眠されたことを紹介いただきました。
- ・立花さんは、人生の節目で様々な決断をしているが、人生最後の時は家族と話しができていないのでは、是非親しい家族の中で話しあって言って欲しいこと、また迷ったときは地域連携室などに相談して欲しいと話されました。



ウェルビーイングデザイン
一般社団法人 Wellbe Design

地域福祉推進を担う機関や人材を支援する非営利型団体
「地域研究」「地域開発」「人材育成」の
包括的プロジェクトによる、地域福祉活動の担い手支援

- 社協（全社協、都道府県、市区町村）の各種事業のアドバイザー活動
社協計画、生活支援体制整備事業、被災者支援
- 行政（都道府県、市区町村）施策に関するアドバイザー活動
地域福祉計画、避難所基本計画、災害時要配慮者・避難行動支援
- 地域福祉・民生委員・ボランティアに関する支援・調査活動
学会活動、民生委員協議会活性化支援、企業活動の支援
- 地域包括ケアの仕組みづくりに関するアドバイザー活動
地域支援事業（主に地域ケア会議、協議体、認知症対策、介護予防事業）
- 福祉専門職の養成に関する各種の活動
社会福祉士養成、ソーシャルワーク実践者支援、災害派遣福祉チーム組成
などを実施

今年で12年目

Follow Me!!

QRコード

Instagram: @wellbe_design

Twitter: wellbe_design

Facebook: wellbe.design

LINE: wellbe_design

YouTube: wellbe_design

1

幸福：医療と介護と保健と福祉の共通理念

日本国憲法

（幸福追求権）

第13条 すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

（生存権）

第25条 すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

2 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

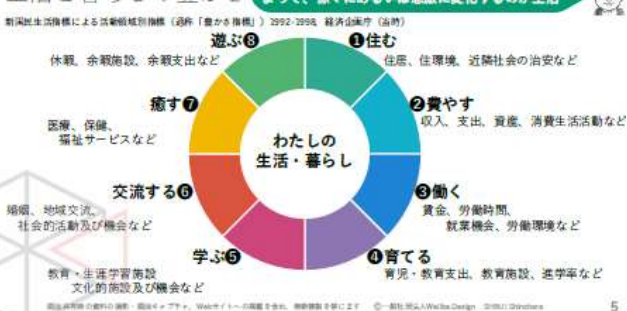
well-being ウェルビーイング
人がより良く生きる目的を果たすこと
一人ひとりの幸福の獲得を理念とした活動
【心理的・精神的】

care ケア
医療：メディカル・ケア
介護：ナーシング・ケア
保健：ヘルス・ケア
地域福祉：コミュニティ・ケア
【物理的・手段的】

すべて「幸福」を理念として展開されています。
「幸福」は「福祉」に言い換えることもできます。

生活と暮らしの豊かさ

加齢、障害、転居、家族や社会の変化、災害等によって、徐々にあるいは急激に変化するのが生活



互酬的な支え合い

互酬性とは返礼の原則であるが、必ずしも対人性を前提としたものではなく、返礼の相手は贈与を受けた相手とはかぎらない。（全国公益法人協会）



もらったものをすぐに同等の価値でかえすことが「支え合いの中での対等性」ではないはず。今自分にできる参加や活動を、他の誰かに返すことが互酬的な支え合いです。

支える側、支えられる側という二者に分けるのではなく、お互いさまの関係づくりを築くことが人権を守ることにもつながります。

災害…生活・暮らし、いのちへの影響

災害時における高齢者等への被害の集中

災害	被害の集中
●東日本大震災	若手・宮城・福島で死者が10名以上の30市町村のうち、27市町村からの回答（2012年NHK調査） 総人口に占める死亡率1.03% →障がい者の死亡率2.06% 障害者の2倍
●平成30年7月豪雨	愛媛県、岡山県、広島県の死者数のうち、60歳以上の死者数の割合→約70%（131人/199人）（高齢者の死者数/全体死者数） （うち市区町村別死者数最大の倉敷市真備町における70歳以上の割合約80%（45人/51人））
●令和元年台風19号	全体の死者数のうち、65歳以上の死者数の割合→約55%（55人/84人）
●令和2年7月豪雨	全体の死者数のうち、65歳以上の死者数の割合→約79%（63人/80人）（うち熊本県約85%（55人/65人））

内閣府資料に一部加算

令和3年5月
災害対策基本法改正
→市町村に対する個別避難計画の努力義務化

近隣住民、民生委員、自治会など、地域の支援者が避難支援中に命を落とす「共助死」も発生しています。

- ・篠原理事長は、「専門職の連携の必要性」、「住民力も必要であること」、「災害対策には保健福祉医療の連携が必要」などについて、ポイントを抑えた詳細な説明をしていただき、憲法や漢字に込められた福祉の意味や、互いに支え合う地域福祉の重要性、災害に備えるためにも地域と専門職がそれぞれの役割を分担することなど、参加者は熱心に耳を傾けていました。
- ・WHO（世界保健機構）や日本国憲法での健康の定義は、肉体だけでなく精神的にも社会的にも満たされていることであり、病気や障がいがあるからということだけでその人の健康がさまたげられているわけではないこと、基本的人権に含まれるものであり、生きる事だけでなく死に様でさえも公共福祉に反しない限り最大限尊重されるもの。
- ・それを実現するためには個人の努力だけでは限界があるので、互酬的關係（お互い様）、さらには1対1の關係ではなく恩送りのような繋がりが地域の豊かさに繋がっていくこと、福祉とは医療介護福祉の専門職が支えるだけではなく住民も互酬的關係で支え合う地域づくりでもありということ、災害では高齢者や障がい者が犠牲になる事が多いことから個別避難計画を策定し備えていくことが必要。

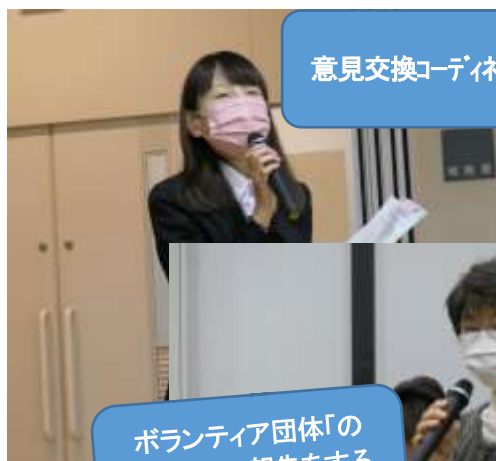
参加者は、地域福祉のあり方として困った時には専門職への相談だけでなく、普段の生活で支え合うことの必要性に対する理解を深めることができました。そうした意識を持つことで最後まで地域に見守られ「その弱っていく姿でさえもみんなに認められながら最後を迎える」という篠原理事長の言葉に今後の生活の中や取り組みをしていく上で地域づくりを考えるきっかけとなる講話でした。



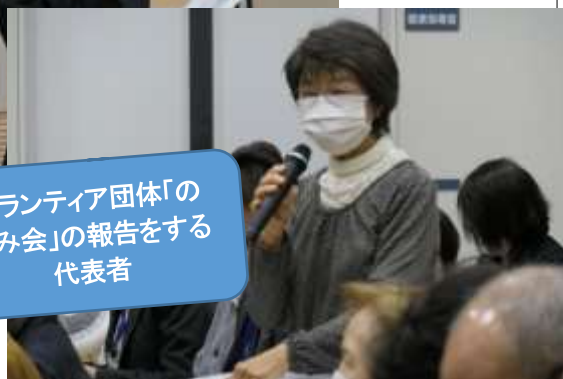
時に傾きながら、熱心に耳を傾ける参加者の皆さんでした。

人生の最後まで健康的な暮らしを支えるために





意見交換コーディネーターの鈴木さん



ボランティア団体「のぞみ会」の報告をする代表者



「食生活改善協議会」の活動を紹介する代表者



団体の活動に所感を述べる篠原理事長



閉会の挨拶は共催団体の「はあとふる沼田」代表、沼田町社会福祉協議会 松田会長

- ・「支え合う地域づくり」をテーマに行われた意見交換では、沼田町の地域包括支援センターの鈴木主査がコーディネーターとなって進められました。
- ・町内のボランティアサークルなど2団体から発言がありました。「のぞみサークル」では活動20年目を迎え、当初は高齢者気軽が気軽集まれる場所が無かったが、お茶会から始まりゲームや食事会を行い、参加者の笑顔とお礼を励みに頑張ってきたこと、「食生活改善協議会」は年1回食事を通してレシピ集の配布や多団体のアトラクションなどを取り入れ活動してきていることの報告がありました。
- ・いずれの団体もコロナ禍にあって活動や会員が減少傾向にあるが、参加者からのお礼を糧に今後も活動を続けていきたいとの発言がありました。
- ・篠原理事長からは、栄養の知識は大事で継続することに意義があることや、社会的孤立により健康リスクが高くなる研究があるが、コロナ禍で社会的距離がとられていても精神的距離は縮めていくためにはこの団体のような取り組みは大変重要で是非継続していただきたいという所感がありました。

○参加者アンケートから

- ・専門職でないが、暮らしを支える人になれるという言葉に感銘した。自分も何ができるか分からないが頑張ってみたい
 - ・難しく考えず、まずは小さな恩送りを一人一人が行っていくことで幸せに支え合える地域が作られていくのだと学べた
 - ・在宅療養するにあたって、とても心強いサポートだと思った
 - ・在宅で暮らす患者さんの思いが伝わってきた
 - ・亡母がお世話になっていた時より充実しているように思いました
- 防災に触れ意識ができた
お互い交流を大事にする事が大事だと痛感しました
(事例を聞いて)涙がでてきました
- ・これからも住民フォーラムを続けてください・参加させてもらいたいです

来年度の開催は現在未定ですが、担当部会で鋭意検討中です。